

マネジメントの規範性を支える哲学的根拠としての プラグマティズムの研究

A Study on Pragmatism as a Philosophical Foundation of Normative Management Theories

岩田 浩
(Hiroshi IWATA)

平成15年度分野別研究、「マネジメントの規範性を支える哲学的根拠としてのプラグマティズムの研究」という包括的テーマの下、1つの研究成果として「プラグマティズムと経営理論 — チャールズ・S. パースの思想からの洞察 —」（経営学史学会編『経営学を創り上げた思想』文眞堂、2004年、14-28ページ）を上梓したので、以下、その概要を示すことにする。

「プラグマティズム」は1900年前後にアメリカを中心に展開された思想運動から生まれたものであり、一般用語としては「実用主義」だとか「現実主義」と訳され使用されることが多い。それとほぼ同時期に生成した経営学においても、同様に理解されるのが一般的ではあるが、私見では、プラグマティズムを1つの哲学思想として、その成立過程から微細に見ていけば、それはこうした見方とは程遠く、もっと深遠な経営学的意味があるように思われる。本稿は、この点を確認めるべく、プラグマティズムの創設者であるC.S.パースの思想を分析し、かかる思想が経営学の理論研究にどのような示唆を提供しうるかを検討したものである。

まず、プラグマティズムの原点を探るために、パースの初期の2つの論文（「信念の固定化」（1877年）と「われわれの観念をいかにして明晰にするか」（1878年））を概観する。これら2論文を通じて、パースは、現前する疑念から逃れて信念を確定することに関わる「探究の理論」と、われわれの認識を明晰化するために認識内容をわれわれの行為の実際効果と関係づけて解釈すべきことを説く「認識の意味の理論」を提唱した。この2つの理論こそプラグマティズムの最も根本的なテーゼなのである。もっとも、パースは、この時点では、プラグマティズムという名称を論文の中で使用しておらず、この言葉を世に広めたのは、彼の親友である高名な哲学者、ウィリアム・ジェイムズであった。だがしかし、パースの理解では、ジェイムズの唱えるプラグマティズムは自分の理論の誤解から生まれたものであり、納得いくものではなかった。この点を正し、パースが自らのプラグマティズムを初めて披瀝したのが、1903年の「ハーバード連続講義」であった。ここで、この講義内容を詳細に紹介する余裕はないが、注目すべき点を2点だけあげておく。①プラグマティズムの原点になった初期の自説に対する反省（＝唯名論に陥っている点）から、論理学—倫理学—美学の三項関係からなる規範学の理論をその哲学的原理として新たに打ち立てたこと、②この哲学的原理から探究理論の核心に迫るべく、探究過程における重要な契機としてアブダクションの論理を帰納と演繹との関係において際立たせたこと。

このように、パースは、その初期の理論においてプラグマティズムの根幹をなす認識論的

テーゼを提起しただけでなく、晩年の「ハーバード講義」においてそれを規範学の理論として展開していく道筋をも示してくれたのだ。本稿では、このパースの理解に従い、プラグマティズムを広義に捉えたうえで、それが経営理論に提供しうる有意味な視点を認識論、道徳論、および知識論のレベルから考察した。そこでの一応の帰結として、プラグマティズムは経営理論に、理論と実践の統合を促すだけでなく、環境への適応過程（組織の環境適応理論への含意）、感性和理性を融合した包括的な推論的認識過程（組織的イノベーション論への含意）、美と善、自由と責任の結合の上に成り立つ価値創造的な道徳過程（経営倫理学への含意）、さらには可謬主義に基づいた知識の発展過程（経営発展論への含意）といった知見をも提供しうるということを明らかにした。以上の考察から、プラグマティズムが経営理論を支える1つの有効な思想的基盤であると結論づけ、稿を結ぶことにした。